

ゲストハウスの同宿者と、私はほとんど話をしない。ラウンジに座っても、マップやパンフを拡げて自分の旅をなぞることに没頭するからだ。ところが、ここ大晦日の古都のハウスでは、私は泊まり合わせたRさんと切れ目なく話を交わしている。といっても、リードしているのはもっぱら彼女の方で、これは新鮮だった。人と話す時は自分が話題を提供して引張っていくのが常だから。

Rさんの話はぴたりと私の興味のツボに嵌っていく。二回りは年下だろうか、身ぶり手ぶりで繰り出す言葉にはパワーがあった。母国語ではないせいか、言い淀んで熟語をさぐる時に、それを言い当てるあげると「ハイソウデス、ソレデス」と話を続ける。

目下取り組んでいるという、茅野の村里の古民家改造に話が及んで、一眼レフカメラを出して写真を見せてくれた。外構や内装を少しずつ自分で整備している。資材や花苗を抱えて外仕事をしていると、近所のお年寄りたちがしきりに覗きに来る。市役所の地域起こし課もやってくる。そんな様子をカメラに収めて、ドキュメントを作っているらしい。ダメダメこななおばあちゃん撮らんで、と写真に収まるお年寄りたちのとびきりの笑顔。古民家は宿泊施設にカフェを併設して地域の人たちが集える場にしたいと、Rさんの目は輝く。

そこには私自身の姿がだぶって見えた。学生時代の仲間で立ち上げた茅野の共有山荘。四十年の年を経て、様々な事情から解体して手離したばかりだった。人生を終いにかかる者が眩しく振り返る若い精神が、Rさんの姿に宿っていた。

「コレカラベンキョウスルナラテツガクデス」突然、言葉が響いた。どちらが発したのだろう、酔いが回った体の中にすっと降りていく。

オーナーが足音をたてずに戻ってきてフロントの明かりを消すと、ドアの向こうへ消えた。テツガク、テツガク。この言葉を宙ぶらりにさせて、私たちは漠然と再会を期して除夜の宴を切り上げたのだった。